

# 陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2017

—多くの大学が陸前高田でやってきたこと—

## 発表論文集

平成29年（2017年）

1月21日(土)～22日(日)

於 陸前高田コミュニティホール



# 陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2017

日 時：平成29年1月21日（土）11時～18時（受付開始：10時30分）  
22日（日）10時～15時（受付開始：9時30分）

会 場：陸前高田市コミュニティホール

主 催：岩手大学、立教大学

後 援：陸前高田市、陸前高田市教育委員会、復興庁、いわて高等教育コンソーシアム、ふるさといわて創造協議会

## タイムテーブル

日 時	内 容	会 場 ※○数字は案内図の番号	備 考
21 日	11:00 開会	② シンガポールホール	
	11:10- 取組発表①	② シンガポールホール	
	12:50		
	休憩		
	14:20- 取組発表②	② シンガポールホール	
	16:00 グローバルキャンパス説明会	③ 大会議室	対象：一般市民
	16:30 ポスターセッション	① エントランス	
22 日	18:00- グローバルキャンパス利用説明会	② シンガポールホール	対象：大学関係者
	9:30 受付開始		
	10:00- 取組発表③	② シンガポールホール	
	12:00	③ 大会議室	
	休憩		
	13:30- 取組発表④及び全体討論	② シンガポールホール	
	15:00 閉会	② シンガポールホール	
	15:45 盛岡行バス出発	入口前	

## 陸前高田グローバルキャンパス

### 大学シンポジウム2017 開催にあたって

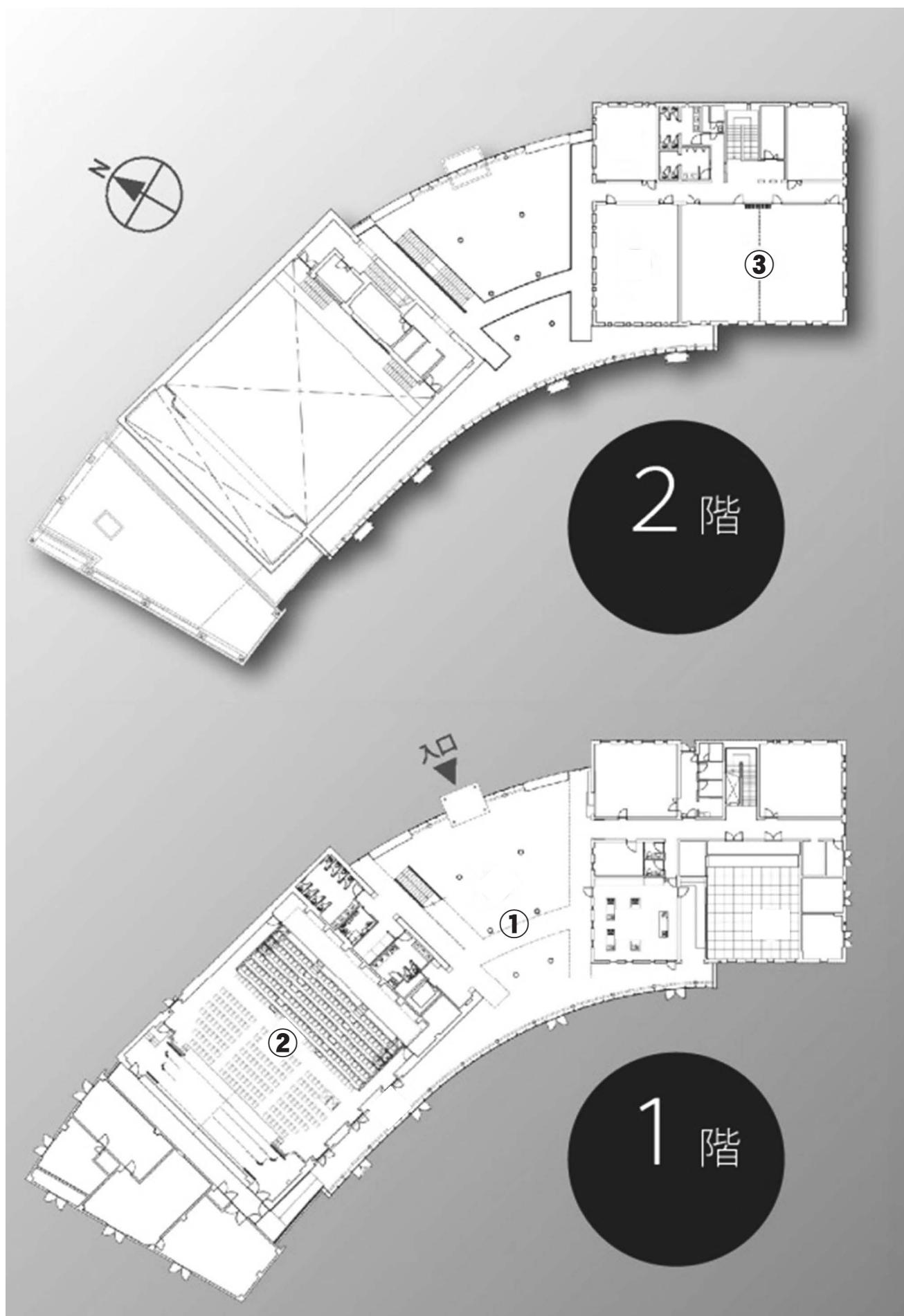
この度は、「陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2017」にご参加いただきありがとうございます。

東日本大震災の発生後、陸前高田市を始めとする被災地で、全国の大学が震災からの復旧・復興に向けて活動を行っており、現在多くの活動が継続されています。発災から6年が経とうとする今、陸前高田市やその周辺地域で行われてきた大学のこれらの取り組みを振り返り、大学関係者、そして陸前高田市・その周辺にお住まいの皆さまがそれらの取り組みを共に理解することで、大学間、また、大学と市民の間に新たな繋がりが生まれ、それが復興を加速するエンジンとなることを目指して本シンポジウムを開催することとしました。皆さまにおかれましては、立場を超えて互いに意見を交わし、交流を深めていただけすると幸いです。

なお、本シンポジウムでは、陸前高田市のご協力の下で立教大学と岩手大学が本年4月に共同で開設する交流活動拠点「陸前高田グローバルキャンパス（愛称：たかたのゆめキャンパス）」について、大学関係者や市民の皆さんにご説明し、その活用方法等についてご意見、ご要望を伺う機会ともさせていただきますので、ご協力のほどよろしくお願ひ致します。

# 会 場 案 内 図

1階シンガポールホール（②）、2階大会議室（③）内での飲食はご遠慮ください



---

M E M O

---

## 取組発表スケジュール【21日】

◆11：10 - 12：50 取組発表① @シンガポールホール（案内図②）

氏名	所属	発表タイトル
松山 真	立教大学コミュニティ福祉学部	立教大学コミュニティ福祉学部『陸前高田交流プログラム』における教育効果
宮城 孝	法政大学・明治大学・東京大学・工学院大学・帝京大学陸前高田地域再生支援研究プロジェクト	陸前高田市の仮設住宅における暮らしの変遷、そして地域再生
藤室 玲治	東北大学高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター	東北大学・神戸大学・岩手大学の3大学連携での陸前高田市支援活動と学生への教育効果
中原 美香	明治学院大学ボランティアセンター	陸前高田市での大学生の活動に影響を与える要因についての考察

◆14：20 - 16：00 取組発表② @シンガポールホール（案内図②）

氏名	所属	発表タイトル
森本 涼	ハーバード大学ライシャワー日本研究所	Future Prospects of A Participatory Archive
藤枝 聰	立教大学総長室	立教大学陸前高田サテライト：陸前高田と立教大学のさらなる交流に向けて
倉島 栄一	岩手大学農学部	震災後の標高データによる気仙川下流左岸側の河川氾濫についての一考察
金山 素平	岩手大学農学部	カキ殻を用いた土の固化処理技術に関する研究
山本 清仁	岩手大学農学部	津波により被災した水田の塩分濃度調査

## 取組発表スケジュール【22日】

### ◆10:00 - 12:00 取組発表③ @シンガポールホール (案内図②)

氏名	所属	発表タイトル
間間 理、榎 泰輔	九州産業大学希望のあかりプロジェクト	希望のあかりプロジェクト 2011-2016
柳田 泰樹	青山学院大学ボランティア・ステーション	青山学院大学ボランティアステーション陸前高田プロジェクト —思いをつなぐプロジェクトにするための考察—
今本 亘	東北大学陸前高田応援サークル ぽかぽか	陸前高田応援サークル「ぽかぽか」の活動 —寄り添いとコミュニティ形成支援
井手 菜摘	お茶の水女子大学文教育学部 グローバル文化学環	つながりを考える ~陸前高田と私たち~
鈴木 光	岩手大学三陸復興サポート学生委員会	岩手大学三陸復興サポート学生委員会における陸前高田市での活動

### ◆10:00 - 12:00 取組発表③ @大会議室 (案内図③)

氏名	所属	発表タイトル
大須賀 匠	東京農業大学総合研究所 両角研究室	「『グスコーブドリの伝記』を例とした賢治の理想世界」 —被災地の今・陸前高田より—事例報告
広田 純一ほか	岩手大学地域創生・三陸復興推進機構	森の前地区の花壇を通してコミュニティ再生の取組について（仮）
佐々木 誠	岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 心のケア班	岩手大学心のケア班復興支援活動報告
井上 博夫	岩手大学COC推進室	復興政策とまちづくりの課題
松嶋 卵月	岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 三陸復興部門園芸振興班	三陸被災地域における園芸振興 ーがんちゃんの三陸野菜畑の試みー

### ◆13:30 - 14:45 取組発表④ @シンガポールホール (案内図②)

氏名	所属	発表タイトル
船戸 義和	岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 地域コミュニティ再建支援班	災害公営住宅におけるコミュニティ形成支援
河野 哲也	立教大学文学部	多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育の創出
熊谷 圭知	お茶の水女子大学文教育学部 グローバル文化学環	お茶大「陸前高田実習」で何を学んだか、わたしたちに何ができるか？

## ポスター発表 タイトル等一覧

ポスターセッション中（21日 16:30-18:00）は、発表者による説明が受けられます

### ◆エントランス（案内図①）

No.	氏名	所属	発表タイトル
1	五味 壮平、嘉村 祐人、武田 桜、小山内 慶ほか	岩手大学 岩大 E_code	岩大 E_code プロジェクトについて
2	間間 理、榎 泰輔ほか	九州産業大学希望のあかりプロジェクト	希望のあかりプロジェクト 2011-2016
3	柳田 泰樹、宮澤 和浩	青山学院大学ボランティア・ステーション	青山学院大学ボランティア・ステーション 陸前高田プロジェクト
4	熊谷 圭知 <sup>①</sup> 、中村 雪子 <sup>①</sup> 、小田 隆史 <sup>②</sup>	①お茶の水女子大学 ②宮城教育大学	Fieldwork Practice and Commitment at Tsunami-hit Area: Ochanomizu University's Students in Rikuzentakata-city, Iwate Prefecture, Japan
5	小林 大一郎	東北大学陸前高田応援サークル ぽかぽか	「動く七夕」支援の意義
6	今本 亘	東北大学陸前高田応援サークル ぽかぽか	陸前高田市での経験を熊本へ 一東北からの熊本地震被災地支援活動
7	藤室 玲治	東北大学高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター	陸前高田市内の「まちづくりワークショップ」の実施
8	長谷川 伸	関西大学商学部	陸前高田と縁を結ぶプラットフォームとしての「書き書き」
9	長谷川 伸	関西大学商学部	陸前高田の農業女子と産地直売所の魅力を 発信する国際プログラム eJIP.jp
10	牧野 友紀 <sup>①</sup> 、松本 祥子 <sup>②</sup> 、山田 香 <sup>③</sup>	①名古屋工業大学 ②東北福祉大学 ③山形県立保健医療大学	東日本大震災と女性の復興支援のあり方 一陸前高田の学びから一
11	崎坂 香屋子	帝京大学大学院公衆衛生学研究科	法政大学、明治大学、工学院大学、東京大学、帝京大学大学院等による陸前高田地域再生支援研究プロジェクト：陸前高田市全仮設住宅世帯調査 2016年調査結果
12	藤室 玲治	東北大学高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター	海外学生の学びの場としての陸前高田市
13	岡田 益己	岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 三陸復興部門園芸振興班	三陸の夏の涼しさを活かした夏どりイチゴの栽培とその普及
14	加藤 一幾	岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 三陸復興部門園芸振興班	三陸沿岸地域の農家が受け入れやすい新農業技術とは 一早どりカリフラワー栽培普及の事例から一
15	西川 尚男	岩手大学生産技術研究センター	岩大生産技術研究センターの活動事例紹介
16	小野寺 純治	岩手大学 COC 推進室	岩手大学 COC 事業で実施している被災地学修の取組

— M E M O —

# 陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム 2017

—多くの大学が陸前高田でやってきたこと—

## 発表論文 (発表順に掲載)



# オーラル（口頭）発表



# 立教大学コミュニティ福祉学部『陸前高田交流プログラム』における教育効果

Education effects of 「 Rikuzentakata Interaction Program」 organaized Rikkyo Graduate School of Community and Human Service

松山真

立教大学コミュニティ福祉学部

**概要：**立教大学コミュニティ福祉学部は 2011 年 11 月から『陸前高田交流プログラム』を実施している。5 年の経過を振り返り、その教育効果について整理する。

**abstract :** Rikkyo Graduate School of Community and Human Service had organaized 「Rikuzentakata Interaction Program」 since November 2011. In this article, consider the Program at the point of education effects.

## 1. 学部プロジェクトの発足

2011 年 3 月 11 日以降、最大余震を警戒して大学は卒業式・入学式を中止し、新年度授業開始も 5 月連休明けとなつた。その間、コミュニティ福祉学部教員の中で、阪神・淡路大震災時に支援活動を経験していた教員を中心に、学部の専門性を生かした救援・支援活動を組織的・継続的に活動すべきという意見が出た。『いのちの尊厳のために』を学部の設立理念としている学部として、この大震災において多くの命が失われ、いのちの危機に晒されていることに座しているわけにはいかないという想いであった。4 月 12 日に『コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト』(以下、学部プロジェクト) を発足した。担当教員は 7 名で始まった。

## 2. 活動準備期

学部の専門性を表す「コミュニティ」「福祉」「健康」を用いて支援活動が出来るのは、避難所から仮設住宅に移行した後であろうと考え、6 ヶ月後（10 月以降）を活動開始と定め、被災地視察を含め準備を開始した。「人」「物」「資金」「活動拠点」「プログラム」については次のようにした。

- ・「人」-学部教員 12 名が担当となり、学部管轄人件費の一部（約 900 万円）にてプログラムコーディネーター・経理担当事務・RA を雇用した。
- ・「物」-学内に専用の部屋を確保。自動車他の寄付を受ける。
- ・「資金」-学部管轄人件費のほか、学部から毎年約 300 万円を拠出し原資とした。その他、学内競争的研究・教育資金（計約 1000 万円）、さらに赤い羽根共同募金など学外助成金を獲得し、年間約 3,000 万円の活動資金を確保した。
- ・「プログラム」-学生と教員が共に活動することで学部の専門性を体験的に学ぶことが出来るプログラムを志向する。人々の生活を理解し、信頼関係を構築し、人々のニーズに沿ったものにする必要がある。そのためには、同じ地域で長期に、交流を中心とした活動することが必要。
- ・「活動拠点」-学生と教員が共に、安全に、安心して活動出来る拠点を定めるため、教員が持つ震災以前からの関係機関などを訪ね、宿泊先・活動内容・現地コーディネーターを調査した。

被災地に行くことだけが活動ではなく、また被災地で活動できる学生は限られていることから、多くの学生が参加出来る学内プログラムと、大学近隣に避難されている地域も活動拠点とした。被災地の活動拠点は、陸前高田・気仙沼大島・石巻・南三陸・いわき（2015 年より）となった。

「活動期間」は、当初から 5 年以上を想定していた。

	短 期	中期（1 年～3 年）	長期（5 年～10 年）
学内	◎	◎	◎
関東圏	○	○	○
被災地	○	◎	◎

5 年間で延べ 255 回プログラムを実施し、延べ 3,000 名を超える参加者がいる。（学生約 2,400 名）

### 3. 陸前高田交流プログラムのはじまり

不思議な関係から、小友町西下の一軒家を貸して頂くことが出来た。20名あまりの方々が避難所として使用されていたが、仮設住宅に移られ空くことで貸して下さるということになった。布団、食器、冷蔵庫、電子レンジなど生活に必要な物は全て整っている家であった。多くの団体が宿泊先を探し遠野や一ノ関から通っている中で、陸前高田市内に安全な拠点を設けることが出来たことは、大きな財産となった。2012年度松山は1年間の研究休暇を許されたことから、この小友町の家に住み活動に専念することにした。個人的活動をする中で人間関係を広げていき、学生を連れて行ける場所も開拓していく。また「泊まることができる家がある」という特徴を最大限生かすプログラムを考えた。

### 4. 陸前高田交流プログラムのコンセプト

同じ場所に、何度も繰り返し訪問する中で、学生と住民の間に安定した関係が築かれる。その関係の中で行う活動は、学生・住民双方に多くのものをもたらした。そのコンセプトは以下のとおりである。

- 1) 「支援する人」と「支援される人」の関係にならない（ボランティアをするのではない）
- 2) プログラムの「準備された交流」は、「はじまりのはじまり」にすぎない
- 3) 自分から手紙を出し、「本物の交流」へと発展させて欲しい
- 4) 学部理念「いのちの尊厳のために」を学びとる教育活動

仮設住宅、仮設店舗、災害公営住宅などで交流を重ね、その後手紙を書き写真と共に送っている。卒業しても手紙を送り続ける者や、個人的に訪ねて行く者も居る。現地に就職する者も出ている。

### 5. 学生にとっての学び

#### 1) いのちの尊厳を学ぶ

このプログラムに参加した学生は、「陸前高田に来た」ということだけを喜んで貰える体験をする。名前も能力も成績も関係無く、存在そのものを喜んで貰えるという体験をする。陸前高田には、津波の悲惨さや破壊された街を見に行くのでは無い。生きていることの素晴らしさ、日常生活の何気ないやりとりの尊さ、家族や人の存在の大切さ、それらを教えて貰いに行く。出会う人たちは、初めて会った学生に、命があることの大切さを直接語って下さる。多くのいのちが失われたからこそ、いのちの大切さ、日常生活の尊さを心の底から感じ入り、他者に伝えて下さる。

停電で電気が点かなくても、ロウソクが一本あれば生活が出来る。ロウソクで生活して分かったのは、家族のありがたさだった。夕食の時、おにぎりしか無くても、ロウソクを1本立てておくと、ロウソクの周りに家族が集まってくる。みんなが一つのテーブルの周りに、顔がつくくらい、くっついて座る。携帯もテレビも使えないから、みんな寄ってきて話始める。

ロウソクの生活だった時、家族とこれまでで一番話しをした。お互いのことをありがたいと思った。こんな何でもない家族との時間がとても貴重なことだと分かった。一緒に居て笑っていられればそれでいいんだ。

#### 2) 真の豊かさを知る

食べる物、遊ぶ場所、電化製品など物に溢れ、便利で効率的な社会に住む者が勘違いしてしまう、「豊かな生活」とは何かを考えさせられる体験がある。古い家にお招きし、なべ焼きや饅頭を一緒に作り食べる。近所の方が鮑や鰯など採れた物を分けて下さる。毎回訪ねる魚屋さんでは生きたものしか売っていない。一緒に作った料理を大きなテーブルを囲んで賑やかに食べる。造り方を教わり自分で作ってみることもある。テレビも携帯も出番が無い時間が過ぎる。人間関係も、時間の流れ方も、食材も、文化も豊かな地域で有り、豊かな生き方をしている人たちに出会える。

エアコンの効いたベッドに寝ている学生にとっては、押し入れから布団を出して畳に敷くこと、石油ストーブに

石油を入れることすら初体験。陸前高田に滞在する 2 日か 3 日は異文化体験にも似た体験になる。

## 6. 住民の方々にとって期待される効果

陸前高田の人たちにとっての日常に学生たちが入ることによって、お互いに非日常の時間を持つことになる。住民同士ではもう話す機会が少なくなってきた津波の体験も、学生には語ることが出来る。時間が経つにつれて、孫の話し、地域の行事の話し、文化の話し、仕事の話しなど日常の話しも出て来る。そこには、支援者と被災者という関係ではなく、遠くから会いに来た親戚の子のような関係がある。長く継続的に交流することによって、学生は替わっても繋がりは深くなり、共に悲しむ、共に喜ぶ体験を重ねて行く事が出来る。

これらは「支援者が被災者に対してこころのケアを行う」というハイリスクアプローチではなく、「結果的にこころのケアになっている」という自然なアプローチが取られ、効果が期待される。また、病気や症状を治そうとする介入ではなく、共に笑い合い、思い出となる写真を見てまた笑い合うという時間がもたらす効果も期待できる。

## 7. 今後の展望

震災から 6 年になろうとしている。人々の記憶が薄れしていくことは自然の流れである。当初想定していた「5 年から 10 年の継続的支援」という期間の折り返しを過ぎた。大学に入学してくる学生は震災当時小学生だった子どもたちになっていく。そうした中でこの活動をいつまで継続するかを想定せざるを得ない。さらに、活動資金の調達が徐々に困難になっていく環境要因の影響も受ける。

しかし、立教大学としては「陸前高田サテライトキャンパス」を 2017 年 4 月に開設するように、立教大学と陸前高田の関係は新たな段階に移っていく。今後も学部独自のこの活動は、継続していく。当初「ボランティアをするのではない。交流をするのだ。」してきたこの活動は、目的を変更することなく継続することが出来ると感じているし、学生にとって学部の理念を座学で無く学ぶこの活動を、今後も学部として継続して行きたい。

## 参考文献

- ・森本佳樹、松山真、和秀俊、荻生奈苗、「コミュニティ福祉学部の震災復興支援の取り組み」、コミュニティ福祉研究所紀要第 1 号、2013 年、pp. 107-128
- ・『復興支援活動 2 年半の歩み』、立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト発行、2014 年 3 月
- ・森本佳樹、松山真、湯澤直美、長倉真寿美、大口達也『復興支援 3 年～ “伴奏” の軌跡』、立教大学コミュニティ福祉学部『まなびあい』第 7 号、2014 年、pp. 168-p176
- ・『復興支援ってなんだろう？-人とコミュニティによりそった 5 年間』、立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト、本の泉社、2016 年



## 陸前高田市の仮設住宅における暮らしの変遷、そして地域再生

The Change of the living in the temporary housing in Rikuzentakata City, and Reconstruction of community

宮城 孝<sup>1</sup>・山本俊哉<sup>2</sup>・神谷秀美<sup>3</sup>・崎坂香屋子<sup>4</sup>・藤賀雅人<sup>5</sup>・仁平典宏<sup>6</sup>・  
松元一明<sup>7</sup>・染野享子<sup>8</sup>

<sup>1</sup>法政大学 <sup>2</sup>明治大学 <sup>3</sup>マヌ都市建築研究所 <sup>4</sup>帝京大学大学院 <sup>5</sup>工学院大学  
<sup>6</sup>東京大学大学院 <sup>7</sup>(財)地域開発研究所 <sup>8</sup>法政大学大学院多摩共生社会研究所

**概要**：陸前高田地域再生支援研究プロジェクトについて、先ずその目的やこれまで行ってきた共同調査・支援活動の概要を報告する。そして、これらのアクション・リサーチの取り組みについて、第一に、仮設住宅に居住する被災者の暮らしとコミュニティの状況を把握するニーズ・キャッチ機能、第二に、被災住民が自ら地域の課題を考え、主体的に地域再生に取り組むエンパワメント(主体形成)の支援機能、第三に、住民の置かれた状況やニーズ、声をアドボケート(代弁する)機能として整理した。最後に、今後の陸前高田市において長期化する仮設住宅居住者への支援のあり方と地域再生に向けた課題について検討した。

**abstract** : In this article, We reports the purpose and outline of action research by the Rikuzentakata community support research project. The functions of this action research are needs catch, empowerment, and advocate. It reviewed about the way of the support to the temporary housing resident. that are prolonged in Rikuzentakata City in the future and the problem of reconstruction of community.

### 1. はじめに

陸前高田地域再生支援研究プロジェクトは、東日本大震災において岩手県で最も甚大な被害にあった陸前高田市をフィールドとして、2011年5月から今日まで調査や支援活動を行ってきている。先ず、本プロジェクトの目的やこれまでの調査・支援活動の概要について報告する。その上で、これまで行ってきた調査・支援活動を振り返り、その意義について、アクション・リサーチの機能の点から三点に整理した。最後に、長期化する仮設住宅における暮らしを支援するまでの課題について考察した。

### 2. 陸前高田地域再生支援プロジェクトについて

本プロジェクトは、陸前高田市の被災住民自身が、地域の再生、生活再建に向けて、その課題を話し合い主体的な取り組みを行うことを支援し、被災地におけるコミュニティ形成のあり方とともに模索しながら、地域再生のモデルづくりに寄与することを目的としている。本プロジェクトのメンバーは、社会福祉、都市計画・建築、公共政策、社会学、公衆衛生などの研究者・実務家で構成されており、2011年5月から現在まで、調査や地域再生のワークショップなどを実施してきている。

### 2. 陸前高田市におけるアクション・リサーチの概要

本プロジェクトによる陸前高田市におけるアクション・リサーチの内容は、以下の三点に整理できる。

#### ① 調査活動

陸前高田市内・外の52の仮設住宅における居住者の転入出の状況、配慮が必要な人の有無と状況、生活環境、自治会活動等のコミュニティの形成状況、外部支援等について、自治会長等にインタビュー調査を実施し、その結果を分析し報告書にまとめ関係者に送付している。この調査は、2011年8月から2016年8月まで6回実施してお

り、各地域における仮設住宅の状況の変化の把握を行ってきてている。表1は、2016年8月現在の自治会長が把握している各地域の居住世帯数であり、これによると、地域によってかなり差が生じていることがわかる。

また、2013年と2016年には、市内の仮設住宅の居住世帯に対し、仮設住宅の住まいと暮らしに関するアンケート調査を実施している。主な質問項目は、仮設住宅の暮らしの評価、ストレスを感じる事、今後の暮らしで不安に思うこと、今後の住まいの意向。仮設住宅の撤去・集約化に関して、仮設住宅生活での相談相手、1年前と比べた健康状態、地域の復興や生活再建に対する情報提供や住民参加についてなどである。

この調査結果についても、速報版、概要版として報告書にまとめ、関係者に送付している。

**表1 自治会長が把握している仮設住宅団地の居住世帯数（2016年8月現在）**

町名	調査団地数／団地数	住戸総数	居住戸数	居住率（%）
高田町	8/9	513	287	55.9%
竹駒町	6/6	271	230	84.9%
横田町	5/5	218	102	46.8%
気仙町	6/6	152	54	35.5%
米崎町	7/8	291	150	51.5%
広田町	1/2	198	47	23.7%
小友町	3/5	282	88	31.2%
矢作町	5/5	153	82	53.6%
計	42/46	2,168	1,040	47.9%
住田町	3/3	88	33	37.5%
合計	45/49	2,256	1,073	47.6%

## ② 住民主体による復興まちづくりのためのワークショップの開催等の支援

震災の初期には、長部町要谷・福伏地区、広田町における防災集団移転協議会の組織化支援を行ってきていた。2012年からは、長部町要谷、広田町、高田町、米崎町の住民が主体となった復興まちづくりのためのワークショップの開催の支援を行ってきた。

また、2014年からは、広田町、小友町における逃げ地図づくりのためのワークショップ、広田町田谷地区において、地元に密着した県営野外活動センターのあり方を検討するワークショップ開催の支援などを行ってきていた。

## ③ 被災住民への情報提供、行政等への提言活動

上記の調査結果について、被災者や行政、支援関係団体等に対して、フィードバックに努めるとともに、被災者の状況や声をもとに、被災者支援や復興まちづくりに関する提言活動を行ってきてている。

## 3. 本プロジェクトによるアクション・リサーチの取り組みの機能

これらのアクション・リサーチの取り組みは、以下の三つの機能を有していると考えられる。

### ① ニーズ・キャッチ機能

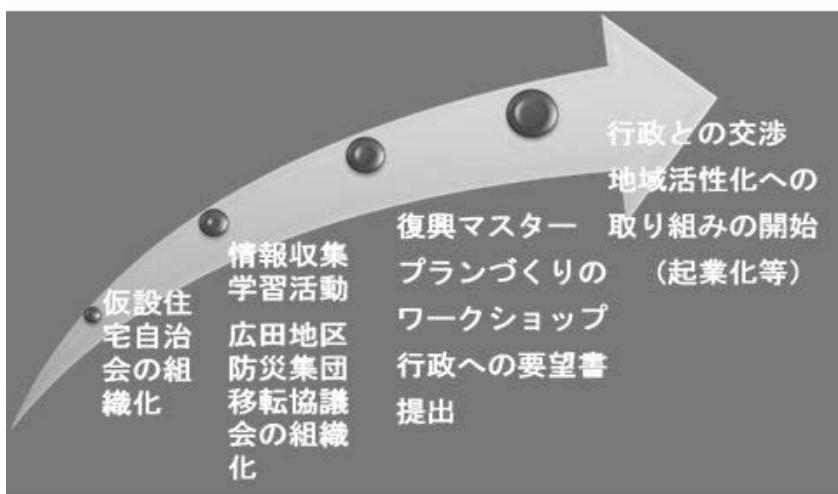
仮設住宅にky住する被災者の暮らしとコミュニティの状況を把握する。

## ② エンパワメント形成の支援機能

被災住民が自ら地域の課題を考え、主体的に地域再生に取り組むエンパワメント（主体形成）の支援

以下の図は、これまでの広田地域における地域再生に向けた被災住民のエンパワメント形成のプロセスを示したものである。

図 I 陸前高田市広田地域における  
被災住民のエンパワメント形成のプロセス



## ③ アドボケート機能

被災住民の置かれた状況やニーズ、声をアドボケート（代弁する）取り組み。

## 5. 今後の課題

これまで、陸前高田市の仮設住宅団地においては、同じ仮設住宅内の友人や知人によるインフォーマル・サポートがかなり機能していた。しかし、仮設住宅の居住世帯が減少していく中で、今後の長期化する仮設住宅の暮らしにおいては、インフォーマル・サポートの脆弱化を前提とした支援方法のあり方を、関係機関・団体が検討し共有化していくことが必要である。これからも、時間的な経過とともに、仮設住宅の状況はかなり急激に変化していくことが予測される。その地域的な特徴や各仮設住宅団地の状況を把握しながら、潜在的に困窮している世帯にアウトリーチしていく支援が求められる。

## 参考文献

- ・宮城 孝「被災住民のエンパワメント形成支援による地域再生の可能性と課題-岩手県陸前高田市におけるアクション・リサーチを通して-」,日本地域福祉学会東日本大震災復興支援・研修委員会編『東日本大震災と地域福祉-次代への継承を探る-』2015年,中央法規, <http://rikuzetakatapj.jinbo.com>

## 著者紹介

宮城 孝：法政大学現代福祉学部教授,専門は、地域福祉論,2011年より陸前高田  
地域再生支援研究プロジェクト研究代表  
住所：〒194-0298 東京都町田市相原町 4342 法政大学現代福祉学部  
E Mail: miyashiro@hosei.ac.jp





# 陸前高田市での大学生の活動に影響を与える要因についての考察

Observations on Factors That Could Make Influences on Students' Activities in Rikuzentakata

中原美香<sup>1</sup>

<sup>1</sup>明治学院大学

**概要：** 本稿では、明治学院大学ボランティアセンターに所属する学生の陸前高田市における活動を変化させる要因について考察する。そのような要因は大きく分けて 2 つあると考えられる。ひとつは、復興工事が進むにつれて沿岸部で津波の影響が見えにくくなつたことである。もうひとつは、「活動のマンネリ化」である。東日本大震災から時が経つにつれて、活動をゼロから創ってきた学生たちが卒業し、「プログラムの継続」が活動目的の大きな部分を占め始める恐れが出てきたことである。これらの要因をふまえ、今後の活動の展望も検討する。

**Abstract:** This article tries to observe what could change students' activities in Rikuzentakata. Two factors seem to be critical: a progress in restoration construction in the city, and possible mannerism in our activities. Taking these factors into consideration, I also like to consider possible future prospects of the activities.

## 1. はじめに

本稿では、明治学院大学ボランティアセンターが 2012 年から 2015 年まで、毎年夏に 4 回にわたり実施した、市外（主に関東圏）の小学 4～6 年生を大学生が引率して陸前高田市を訪問するスタディツアーア「かわいい子には旅をさせよ」の変遷を紹介し、まちのようすの変化とともに今後の可能性について考察する。

## 2. 明治学院大学および明治学院大学ボランティアセンターについて

明治学院大学は、1863 年にアメリカ人ヘボン夫妻が横浜にヘボン塾を開設したことを起源として、1887 年 1 月に大学として認可され、白金に校舎が設立された。1985 年、横浜校舎開校。2016 年 5 月 1 日現在の在籍学生数は、学部生 12,197 人、大学院 146 人である。建学の精神および教育理念に「Do for Others（他者への貢献）」を掲げている。これは、新約聖書「マタイによる福音書」7 章 12 節にある”Do for others what you want them to do for you.” から取られ、現在にいたるまで 150 年以上にわたり、明治学院大学の教育の根幹をなしている。

明治学院大学ボランティアセンター（以下、「ボランティアセンター」）は、1998 年 11 月に横浜校舎で設立された、どの学部にも属さない独立した機関である。1995 年 1 月に発生した阪神淡路大震災の際に学生が被災地支援に行ったことがきっかけとなり、学内でボランティア活動を学生とともに作ってゆく組織として横浜校舎で設立された（その後、白金校舎にもボランティアセンターが開設された）。“Do for Others”を実践する学内組織として、また、学生に学外でのボランティア活動情報を紹介するだけでなく学生とのパートナーシップに基づきプログラムを共に作り活動する点が特徴である。現在は校舎近隣でのボランティア活動や国際的な課題についての取り組みにくわえ、東日本大震災で被災した岩手県大槌町および陸前高田市で活動する「Do for Smile@東日本」プロジェクトや日本赤十字社との共同プログラム、1 日ボランティア体験プログラム”1 Day for Others”などを実施している。

## 3. 陸前高田市における活動と活動を変えることになった要因

ボランティアセンターが陸前高田で活動するきっかけは、2012 年 2 月に、なつかしい未来創造株式会社主催のワークショップに学生が参加したことであった。このワークショップのなかで明治学院大学の学生が東京都の小学生を対象にした「陸前高田を知る」・「陸前高田を創る」体験ツーリズムの原案が生まれ、なつかしい未来創造株式会社と県内の旅行会社とともに「かわいい子には旅をさせよ」（以下「かわ旅」）を企画、同年 8 月第 1 回「かわ旅」が実施された。（2013 年以降は HIS の協力を得た。）陸前高田市内の子どもたちと出かけるのではなく、小学 4～6 年生を対象に東京都など主に関東圏から子どもたちを陸前高田市に連れてくる企画である。

つまり、「かわ旅」は、1) 震災を風化させず、2) 子どもたちの防災意識を高めること、そして 3) 陸前高田のファンを作ることをめざし、大学生が小学生を引率するタイプのスタディツアーアであった。

子どもたちは毎日の活動や印象に残ったことなどを絵日記として記し、最終日には「かわいい子新聞」としてまとめる。また帰ってから家族も参加する「同窓会」を秋に開催し、各自が自分たちの住む町での避難マップや災害時の家族との安否確認などについて身近に感じてもらうワークショップなども実施した。

この「かわ旅」以外にも、学生たち自身が陸前高田について学び考えるためのスタディツアーアを年に 1～2 回実施したり、市内で遺留品捜査や高田松原復元をめざす植樹ボランティア活動などを行なったりした。

【写真①：「かわいい子には旅をさせよ」2012年～2013年のようす】

2012年



「津波てんでんこ」自作紙芝居

小学生とともに清掃活動ボランティア

2013年



語り部ガイドの方と市内を見てまわる 今泉地区の集会処「あがらっせ」で花壇づくり

しかし、「かわ旅」はだんだん大きな変更をせざるをえなくなる。たとえば体育館など津波の爪痕を残す建造物の一部が取り壊され、沿岸部の一部ではかさ上げのために使う土が一時的に盛土されていて、大きなダンプカーなどが土煙をあげて走っており、「巨大な工事現場」の印象、あるいは子どもによっては、盛土などに草が生えてきていることから「のどかな田舎の風景」と映ってしまう場合があった。復興工事が進むことはもちろん望ましく、筆者も早く工事が終了し、安全な場所に人々の生活が再建されることを願うひとりだが、「かわ旅」の内容についてだけ言えば、大きく変更するひとつの要因になったことは確かであろう。

2つめの要因として、「活動のマンネリ化」が考えられる。大学の活動として不可避な代替わりにより、学生も事前にスタディツアーで陸前高田市を訪問したり、写真や動画で学んではいても、小学4～6年生に「津波の被害の大きさ」を理解してもらうのが困難になってきた。しかし、先輩が作った「かわ旅」を自分たちの代でなくすわけにはいかない・・・とツアーや存続を重視し、活動が硬直化してしまったのではないかと考えた。

そこで、まず「かわ旅」の内容変更を試みた。2014年には、「2011年3月11日、津波が到達するまでにどう避難したか」を追体験するプログラムを取り入れた。東日本大震災で気仙町今泉地区にかまえていた社屋や蔵などが被害をうけた八木澤商店の河野通洋社長のご指導のもと、八木澤商店の社屋があった場所から、けが人がいる想定で実際に発災から津波が到達した時間までに避難できるか、学生も子どもたちも試されることになった。実際に3月11日に避難された諏訪神社に向かう途中の高台でいたん立ち止まり、当日のようすを河野社長にお話しいただいた。2015年には前年と同様、八木澤商店のご協力をいただき、津波から逃れたあと「3月12日以降を生きぬく」ために必要なサバイバル技術であり「火おこし」をチーム戦で実施した。さらに地域の歴史を知ってもらうため、陸前高田市立竹駒小学校の児童たちとともに隣の住田町で砂金採り体験を実施した。

【写真②：「かわいい子には旅をさせよ」2014年～2015年のようす】

2014年



河野通洋・八木澤商店社長に震災直後の話をうかがい、避難を「追体験」する

2015年



八木澤商店の協力で「火おこし」体験 「うごく七夕」祭りで急遽山車をひくことに



長洞元氣村で防災紙芝居

市内小学生とともに砂金採り体験（住田町）

【図1】「かわいい子には旅をさせよ 4年間の軌跡」

	実施期間	参加人数 (定員 30名)	旅行会社	参加費 (小学生)	宿泊
1回目	2012年8月19日 (日)～22日(水)	23名	岩手県北観光盛岡本社	34,800円	靈泉玉乃湯→ホームステイ
2回目	2013年8月5日(月) ～8日(木)	30名	H.I.S.	34,800円	靈泉玉乃湯(男子)、フレアアイランド尾崎岬(女子)→ホームステイ
3回目	2014年8月20日 (火)～23日(金)	10名	H.I.S.	39,800円	靈泉玉乃湯
4回目	2015年8月5日(水) ～8日(度)	6名	H.I.S.	39,800円	靈泉玉乃湯

さまざまな変更をくわえながら実施してきた「かわ旅」であるが、参加者数が年々減少するなか、このまま「かわ旅」を続けるべきなのか、それとも「かわ旅」の役割はもう終わったのか、先輩たちが作ってきた企画をなくしてよいのか、いったんやめたら二度とできないのではないかなど話し合い、2015年に活動は転換期を迎えることとなった。

#### 4. 今後の活動の展望

2016年度は、学生たちが陸前高田市と子どもたちをもっとつなぎたいのであれば、自分自身がもっと町を知り人とつながる必要があると考え、学生自身が地域のイベントに関わる1年とし、「かわ旅」は実施しないこととした。7月の「きらりんきつず夕涼み会」でのお化け屋敷の企画・実施や、8月の「けんか七夕」・「うごく七夕」の双方で祭り前日からのお手伝い、陸前高田市主催の市内小学生向けのキャンプ事業でのキャンプリーダーや、9月の「広田復興防災祈願祭」のお手伝いをした。このようなイベントを通じてさまざまな年代の方々とのつながりも生まれるなかで、さらに地元の方々と関わる活動を実施したいと学生たちが思うようになった。

2017年度は、「繋がり」を主要コンセプトにおき、学生たちが考える企画を、地元の協力者の方々と相談しながら実施できればと考えている。

さらに、大学がある東京都や神奈川県では、陸前高田で学んだ防災・減災・そして「災害後」のサバイバル術や、陸前高田の魅力を伝える企画などを実施したいと学生たちが考えている。今後も、まちの様子や住民のニーズが変われば学生たちの活動も変化していくだろうが、大学生が常に変化をとらえ対応していくようコーディネーターとしても力を注ぎたいと考える。

#### 著者紹介

中原美香 明治学院大学ボランティアセンターコーディネーター。2013年4月より現職。立教大学法学部法学科卒、米国 Claremont Graduate University Center for Politics and Economics 修士課程修了（専攻：国際政治）。日本でのNPO勤務を経て、2000年以降はNPOのマネジメント支援にも関わる。専門分野はNPOマネジメント、人権、CSR（企業の社会的責任）、ソーシャル・イノベーション。

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町1518 明治学院大学ボランティアセンター

Email: mamuang@mguad.meijigakuin.ac.jp



